

二階堂トクヨとダンス — 東京女子高等師範学校にて (1915-1922) —

村山茂代

足掛け四年のイギリス留学でトクヨはダンス（優美体操）を本格的に学び、女子の体操科にとってダンスは重要な種目であると考え、その指導に抱負をもって帰国した。

母校の東京女子高等師範学校に着任すると、上司の永井道明がまとめた学校体操教授要目にそった指導を強要された。トクヨは勇敢にも要目を拒否してイギリスから持ち帰ったダンスを指導した。そのことにより永井との間に、ダンス指導をめぐる対立が生じた。

本稿では「Ⅱ. 行進ヲ主トスル遊戯」で、要目ではダンスはどのように示されていたかを明らかにする。また、「Ⅲ. 優美体操」ではダンスを指導することでトクヨが考えた抱負とは何かを明らかにする。

永井との対立は同僚との対立に発展し、母校にあった7年間は全く思い通りのダンス指導ができなかったが、トクヨは著書の執筆によって多くの賛同者と名声を獲得した。

キーワード：行進ヲ主トスル遊戯、優美体操、良妻賢母

I. はじめに

二階堂トクヨ（1880-1941）はイギリス留学で初めてダンスを本格的に学び、ダンスは女子の「躰操科の一部として真に価値あることをつくづく知り申候」⁴⁾と、弟の二階堂清寿への手紙に書き、さらに「私には小冊子にものがたき大望と許多の仕事が御坐候本も書くべく講習にも出べく学校も設立すべく候…兎に角く痼義に於いての躰操科満端をわが力にて日本に種を蒔きたいと存じ居候」⁵⁾と、かたい決意をもって帰国した。1922年に創設した二階堂体操塾では、トクヨは体格研究に取り組み、欧米の女性と比較して貧弱かつ偏った発育をしている塾生たちの体格改善を目標としてイギリスから持ち帰ったダンスを指導した。また、日本女子体育専門学校では芸術舞踊家による指導を導入して健康で美しい体づくりを目ざしたことをこれまでの研究²⁾で明らかにした。

本稿では、トクヨがイギリスより帰国して母校の東京女子高等師範学校兼第六臨時教員養成所教授として着任した7年間の研究の範囲とする。その間、トクヨは上司の永井道明（1869-1950）との間にダンスの指導をめぐる意見の相違があり、トクヨが考えた理想

的なダンスの指導ができなかった。そこで、二人の意見の相違について本稿の「Ⅱ. 行進ヲ主トスル遊戯」では、永井がまとめた学校体操教授要目でダンスがどのように扱われていたか、また「Ⅲ. 優美体操」ではトクヨがダンスを教えることでどのような未来を考えていたかを明らかにする。

二階堂トクヨについては下記のような研究がある。

西村絢子著『体育に生涯をかけた女性—二階堂トクヨ—』（杏林書院、1983）は永井との対立について、永井の肩を持つ眞行寺朗生（1882-1939）の意見や卒業生たちの思い出等で示していて、二人のダンスについての考え方の相違を具体的に説明していない¹⁷⁾。また、穴水恒雄『人として女として—二階堂トクヨの生き方—』（不昧堂出版、2001）では、トクヨが自ら選びとった人生を歩んだ生涯についての研究であって、ダンスの指導には関係ないが、永井との対立は、その後のトクヨの人生にとって重要な起点であると考えてるのでこの研究も座右に本研究を進める。

Ⅱ. 「行進ヲ主トスル遊戯」

文部省は1913（大正2）年1月に永井によってまとめられたわが国初の学校体操教授要目を訓令した。永井はトクヨが要目の「裏書者、実施者、宣傳者」³⁾と

日本女子体育短期大学（卒業生）

して活躍してくれることを期待し、トクヨの帰国を待ち望んでいた。

スウェーデン体操を導入したと永井が言う要目にしたトクヨは、さぞ落胆したことであろう。要目では体操科教材が体操、教練、遊戯の3部にまとめられており、遊戯中の「行進ヲ主トスル遊戯」には「十字行進、踵趾行進、『スケーチング』歩法等」とある。トクヨは、留学する以前は體操遊戯取調報告（1905年11月）にそった指導をしていた。その内容は「十字行進、踵趾行進、方舞ノ類」であった。しかし、要目では「方舞ノ類」¹⁴⁾は削除され、代わりに「『スケーチング』歩法等」とダンスステップを教えるが、それはダンスを教えるわけではない。この当時の体操指導では、行進や歩法などの指導を体操指導中に挿入して体操指導に変化をもたせようとするもので、井口阿くり（1872-1931）や永井のように体操指導を最重要と考えている指導者にとって遊戯は特に重要ではなかった¹⁵⁾。

また、體操遊戯取調報告の行進法は坪井玄道（1857-1922）が欧米視察（1901.2-1902.5）の折り、ドイツから持ち帰った行進法¹⁶⁾をもとにまとめられたもので、リング（Pehr Henrich Ling, 1776-1839）によるスウェーデン体操のシステムにそったものでもない。更に、「方舞ノ類」の削除は、過去の舞踏導入の失敗例をあげて、ダンスの導入に反対する永井の考えによるものであった²⁰⁾。以上のように、「行進ヲ主トスル遊戯」は要目への導入に際し、研究討議された形跡もなく要目に収められている。

トクヨはイギリスでリングシステムの体操科を学び、ダンスは女子の体操科にとって重要な種目であると認識を新たにした。イギリスの学校教材として使用されているクロックダンス、メイポールダンスやカントリーダンスなどのイギリスの民族的なダンスを多数持ち帰った²²⁾。それらのダンスは歩運動のみの方舞と比較して種々の歩法によって構成され、運動効果もあり、またイギリスの人々が伝統的に踊り繋いできた楽しいダンスであった。

そこで、トクヨは永井と意見を戦わせたと思われるが、その結果について「スウェーデン式教育體操の一部分にのみしがみついて能事終れりとしてゐます、それもよいとして、其せまい自分の持場以外は悉く踏み蹂って快哉を叫ばんとするに至っては、非道も亦甚だしいもの、露骨に云えば國家の仇、民族の賊、別してはリング式の破戒者とししか考えられませぬ…自分の偏

屈な考えから皇國のためになる事や民族の發展になる事を頭から踏み蹂るのは没義道です。」⁶⁾と、暗に永井を厳しく批判している。

その当時の体操界は男性教師にすべての決定権があり、女性教師は男性教師の決定した方向に従うのが当然であった。体操界の大御所にはっきりと批判的な意見をいうとは、トクヨは非常に勇敢であった。

トクヨは要目の「行進ヲ主トスル遊戯」を受け入れることができなかった。しかし、永井は、女高師に助教授として呼んでくれ、更に留学の機会を与えてくれた大恩人であり、上司であるから悩んだことであろうが、「行進ヲ主トスル遊戯」を無視してイギリスのダンスを指導した。その結果、永井と対立し、また、トクヨの順調な出世を嫉妬する永井や井口の教え子である同僚たちとも対立してトクヨは窮地に立たされた¹⁾。

先輩で恩師の安井でつ（1870-1945）の奔走で事件は収まった。安井の忠告もあったかもしれないが、文部省の直轄校で教える限りは要目にそった指導をしなければならないと、トクヨは考えたのであろう。要目の「行進ヲ主トスル遊戯」の指導へと変更した。しかし、それは教科としての指導の場合であって、講習会ではイギリスから持ち帰ったダンスを指導¹⁶⁾した。また、次々と著書、（1917.8.27）『體操通俗講話』、（1917.9.23）『足掛四年—英國の女學界—』、（1918.5.15）『男女幼學年兒童に科すべき模擬體操の實際』を執筆して大いに持論を展開した。

Ⅲ. 優美体操

イギリスに行っても日本の体操科と大して違いがないだろうと、トクヨは軽く考えてバーグマン オスターバーグ フィジカル トレーニング カレッジ（Bergman Österberg Physical Training College, B.Ö.P.T.C.）に入学してみれば、日本とは「實に雲泥の差」¹⁵⁾であった。トクヨが日本で教えていたスウェーデン体操は、スウェーデン式教育體操の一部分にすぎなかった。

B.Ö.P.T.C.ではリングのスウェーデン式体操の四部門（教育体操、医療体操、武的体操、優美体操）が指導されていて、更にオスターバーグ（Martina Bergman Österberg）の考え²⁾からスポーツ（クリケット、ラクロス、ホッケー、ネットボール、水泳）も導入されていた。

日本ではスウェーデン体操を導入したとは言え、それは「スウェーデン式体操中なる一の教育的体操のまたその中の一部分」にすぎず、しかも、その体操は「男子本位」に考えられた体操で「女子には甚だ不適切なものである」と、トクヨは批判している⁷⁾。また、スウェーデン式体操は上記四部門の体操が導入されて初めて教育的効果があるものを⁸⁾、教育体操の一部分のみを導入して医療体操、武的体操、優美体操の導入は考慮されていないという。

優美体操とは舞踏のことであり、舞踏とは西洋のダンスのみでなく曲線的に出来ている自動運動ならばすべて舞踏であると、トクヨはダンスを広範囲にとらえている⁹⁾。

リングは優美体操と武的体操については、民族精神の育成にかかわる技は、その民族の長い歴史の中に育まれた技によるべきと考え、「実際の範」を示していなかった。日本では柔道をはじめとして優れた武術があり、武的体操として採用することができるが、日本の舞踏は長い間遊興の世界に在って穢れているので、それを優美体操として採用することは出来ない。それ故、現在では外国のダンスを優美体操として行っているが「我が國民族の精神涵養」にはそれは理想ではない。早急に日本の専門家によって日本の優美体操が作られることをトクヨは希望している¹⁰⁾。

教育は「夫れ夫れ完全な男女を造る」ことを目的とするもので、体操科では「男女の特徴を益々發展させる事を務めている」¹¹⁾という。そしてこの目的のために女子には優美体操によって「女子の特徴とする身體の優美、行動の雅致、精神の圓滑を圖る」¹²⁾ことで、身心ともに健康で美しい女性を育成しようと考えていた。そして、女性たちの将来は「良妻賢母」となって幸せな生涯を送ることをトクヨは期待した。

「良妻賢母」とは明治期から第二次世界大戦終了までの女子教育の基本理念であって高等女学校では「良妻賢母」を教育目標としていた。トクヨはこの目標達成のためには、まず健康であることを第一に考えていた。

一方、男子は武的体操によって「男子の誇とする身體の頑丈、行動の勇壯、精神の剛健を期待」¹³⁾するという。そして、理想的に教育された男女の「相合致は始めて完全なる人生を楽しむ事になり、ひいては健全なる家庭が出来、富強なる國家が生ずる」¹⁴⁾と、トクヨは考えた。

以上に述べたように、トクヨにとって優美体操を教

えることは、健康で美しい心身の育成を旨とすることは当然のことであり、更に、当時の女子教育の目標であった「良妻賢母」の育成へと関る強い思いがあった。

IV. 孤立から新たな未来へ

留学前のトクヨは方舞を教えていたが、方舞は女子の体操科教材として重要なものと考えていなかった。B.Ö.P.T.C.の教師による勧めであったと思うが、トクヨは学外に出てバレエやイギリスの民族的なダンスを学んだ。その結果、いつの間にか体重は減少し、背筋が強くなり、これまで出来なかった運動が出来るようになり、ダンスの運動効果に驚くのである。この経験から、トクヨは帰国したらダンスを教え、猫背で四肢が伸びない日本の女性たちの体格を改善して健康で美しい将来の「良妻賢母」を育てたいと考えるようになった。

帰国して母校の東京女子高等師範学校に着任すると、上司の永井は自身が作成に関った要目による指導を要請し、トクヨの意見を採用しようとしなかった。また、同僚たちはトクヨがイギリスで学んできたことに興味をもつわけではなく、トクヨの早い出世を嫉妬して、結託してトクヨを排除しようとした。孤立状態の中で、次第にトクヨは母校でのキャリアを諦め二階堂体操塾創設の方向に目を向けるようになったと考える。

V. まとめ

永井は体操研究に集中していたのでダンスについて詳しいわけではなく、ダンスは価値の低い教材と考えて学校体操教授要目に方舞を採用しなかった。しかし、トクヨは留学でダンスを本格的に学び、ダンスの運動効果を実感し、ダンスの指導によって将来の良妻賢母を育てたいと考えていたので、永井が関った学校体操教授要目にそった指導を拒否した。このことにより、永井との間にダンス指導をめぐる深刻な対立が生じた。トクヨは東京女子高等師範学校教授という立場上、要目による指導を受け入れたので、母校に在任した7年間はトクヨの理想とするダンス指導ができなかった。しかし、著書の執筆により、大いに持論を展開して、多くの賛同者と名声を獲得した。

謝 辞

この論文作成に穴水恒雄日本女子体育大学名誉教授より多くのご教授を賜り、また日本女子体育大学附属図書館より資料収集のためにご協力を頂いたことを心より感謝申し上げます。

注

- (1) 方舞とは19世紀ヨーロッパの上流階級の社交場で踊られた社交ダンス（円舞，方舞）の一種で，日本では1884（明治17）年11月1日より御雇外国人ヤンソン（Johannes Ludwig Janson, 1860-1927）を講師として開催された講習会で指導され，鹿鳴館の舞踏会で踊られた。その当時は「ダンス」という名称は一般的でなく，しばらくの間人々は「ダンス」を「舞踏」と呼び，また「方舞」も「舞踏」と呼んだ。体操遊戯取調報告では円舞は不健全な思想を誘発するとして方舞のみを採用した。

引用文献

- 1) 穴水恒雄（2001）人として女として—二階堂トクヨの生き方— p.82 不昧堂出版 東京。
- 2) ウィストランド，ビルギッタ：穴水恒雄訳（2018）マルチナ バークマン オスターバークとは，どんな女性だったのか，バークマン オスターバークの遺産（没後100年記念研究集会記録） pp.19-20 学校法人二階堂学園。
- 3) 真行寺朗生（1935）近代體育史 pp.472-473 日本體育學會 東京。
- 4) 二階堂トクヨ書簡（1914.3.）キングスフィールドより広島市，清寿殿。
- 5) 同上。
- 6) 二階堂トクヨ（1917.8.27）體操通俗講話 pp.424-425 東京寶文館 東京。
- 7) 同上 p.460。
- 8) 同上 p.392。

- 9) 同上 p.446。
- 10) 同上 p.456。
- 11) 同上 pp.458-459。
- 12) 同上 p.459。
- 13) 同上。
- 14) 前掲6) p.460。
- 15) 二階堂トクヨ（1917.9.23）足掛四年—英國の女學界— p.388 東京寶文館 東京。
- 16) 西村絢子（1981）二階堂体操塾の創設者 二階堂トクヨ 近代日本女性体育史—女性体育のパイオニアたち— p.171 日本体育社 東京。
- 17) 西村絢子（1983）体育に生涯をかけた女性—二階堂トクヨ— pp.182-186 杏林書院 東京。
- 18) 村山茂代（2000）明治期ダンスの史的研究—大正2年学校体操教授要目成立に至るダンスの導入と展開— pp.111-112 不昧堂出版 東京。
- 19) 同上 pp.106-111。
- 20) 前掲18) p.112。
- 21) 村山茂代（2004）二階堂トクヨとダンス—ダンス研究と指導について— pp.49-58 日本女子体育大学紀要。
- 22) 同上。

参考文献

- 1) 井上一男（1970）学校体育制度史 増補版 大修館書店 東京。
- 2) 木下秀明（2014）体操の近代日本史 不昧堂出版 東京。

（令和4年9月9日受付）
（令和4年12月22日受理）

Tokuyo Nikaidou and dance

—From 1915 to 1922—

MURAYAMA Shigeoyo

Bulletin of Japan Women's College of Physical Education, 2023, 53, 81-85

This study will explore Tokuyo Nikaidou's (1880-1941) dance instruction at a teachers college for women in Tokyo from 1915 to 1922.

She refused to teach dance according to the official teaching guidelines for physical education which her boss, Domei Nagai had contributed to.

So, the relationship between Nikaidou and Nagai became tense.

In this paper, the section titled "II. March" clarifies the reason why she refused to follow the official teaching guidelines for physical educations. In addition, the section titled "III. Aesthetic gymnastics" goes into her purpose for teaching dance.

Keywords : March, Aesthetic gymnastics, Good wife and wise mother

